談　話　室

テキサス雑感*

山田　小枝**

羽田からサンフランシスコあるいはロスアンゼルス行の日航機に乗りこめば，知った顔の一つや二つにお目にかかるのが別に珍らしくもなくなったこの項，特にお話するに価するような目新しいあちらの話題を提供することは至難のわざです．それに，たった半年そこそこの滞在で，しかも限られた範囲で見てきたことから，何か断定的なことをいおうとすると，たとえば「毎朝歩いて研究所へ行く途中，出あったのは黒人とメキシコ人のみであった．したがってオースチンの住民は黒人とメキシコ人が圧倒的に多い」といったたぐいの素朴な誤解になってしまうぐらいが関の山でしょう（ただし歩道は草ぼうぼうのオースチンで暑い昼ひなか歩いているのは私と犬だけだと研究所（LRC）の仲間がいっていたのは事実です．後になってポーランド生まれの新進 MT 学者 Dr. Hanna Cole が加わり，二人でオースチン中歩きまわり，もう少しで名物扱いされるところでしたが）．そこで，歩行者が自動車の中の人を観察したような，ずい分やぶにらみな意見だとお笑い頂いて結構です．

アメリカ生活と言っても MT(機械翻訳) や CL（計量言語学）の研究所に関していえば，規模，経済力，人間関係，秩序といった点ではかなりの違いがあっても，どこかヨーロッパや日本の研究所と共通の雰囲気があって，自分の仕事の目標さえはっきりしていれば，すぐに研究生活の中へ融けこんで行けます．恐らくこれは MT や CL だけに限らず新しい科学のどの分野においても同じかと思われます．すでに固定してしまった伝統がないこと，まだかなり基礎的な部分の決定に参加できることなどがその原因でしょうか．アメリカでも「第1にコネ，第2に学歴（どの先生の弟子かということ），第3にやっと実力が問題にされる」というグチはよく聞かされましたが，同じ研究所で同じ研究にたずさわっていれば，いやでもお互いの実力がわかってしまうので，結局それが一番物をいう結果になるし，ある研究所内で認められなければ，他に移ればよい……たとえ師弟の間柄でもこの原則はあてはまる……というわけで，その意味ではアメリカにおける人間関係は日本よりはるかにさっぱりとして明るいといえると思います．とにかくアメリカという国は，地理的に広いだけに包容力が大きいという点は羨しい限りです（これは何でも良いからアメリカへ行けば何とかなるという意味ではもちろんありません）．MT や CL にしても自分から理論派と称するグループ，その中でも，最も抽象的演繹的な変換文法理論の機械適用を考えているグループ（Harvard など），変換文法の良さは利子が自分のところは句構造文法一本槍で行こうとするグループ（Texas 大など），従属関係文法しか使わないグループ（Ravd 大など），レベル理論で初めから終りまで行こうとするグループ（California 大など），また，既成の理論など全然問題にしないで有効なものは有効なんだというグループなど多種多様であり，互いに相手のやることに注意は払っているものの，自分のやり方が最上だと信じて疑わないのは，流行に弱い日本と比べて大いに考えさせられる点です．1960 年頃から MT のプログラミングの定説のようになっている．文法規則とサブルーチンで処理しないで表としてメインルーチンが切り離しておくというやり方も，また，MT のための文法に入力言語の分析部分，変換部分（transfer）および出力言語の合成といった3部分に分かれるという考え方すらいまだに無視し，行きあたりばったり方式などと悪口をいわれながらも，理論の裏付けがあると称するグループよりずっと立派な結果を出している Garvin のグループ（Bunker-Ramo）はこの最後の例ですが，この小グループの着実な進歩を見る時，「理論はすぐれているが output はおもわしくない」という言い方は確かにおかしいという気がしてきます．「理論がすぐれているからこそ結果が良い」のが当然で，抽象的に整然と記述されてはいるが具体化の方式を与えることができないか，または与えても非常に非実際的であるような理論

* Comment on Texas Life, by Sae Yamada

** 立正大学文学部

は，現実に存在する生きた言語を，計算機というわくの中で取り扱う分野での理論として何か欠陥があるのではないかという気がします．しかし，このようなあまりにも本当のことをいうと軽蔑を招く恐れが多分にあります．あるいは軽蔑するふりをするのでしょうか．私はむしろ後の方ではないかと思っております．

アメリカへ行って一番びっくりしたことは，3年ほど前にいたフランス（に限らず一般にヨーロッパ）などに比べて，大学関係とか研究関係の在留日本人の数が桁ちがいに多いということでした．現在どの位の人数が滞米中か見当もつきませんが，今年の春頃発足した在米日本人の学術関係者の名簿を見た感じでは，少なくとも数千人は下らないのではないかと思われます．それだけ大勢の日本人の学者がアメリカで必要とされるというのは誇らしいことだといえるかもしれません．しかし，日本で「優秀な頭脳の海外への流出」を問題にする時，日本の学問の損失，日本人学者の優秀性といった問題にかくれてしまっている他の面を見逃がしているようです．つまり，これら日本の頭脳がアメリカでどのような使われ方をしているかということです．もちろんわれわれがよく知っているように，国際的に活躍してその一挙一動が世界から注目されているような日本人学者も大勢アメリカにいることは確かでしょう．しかし残念ながらそういう方進はあんまりお目にかかれませんので，ここで問題にするのはそういった例外を除いた一般の学者のことです．

日本で，輸入直訳型，あるいは伝統のわくの中での研究に慣れっこになっていたため，外国の研究生活でまったく異なった価値判断に出あって立ちすくんでしまうという例がかなり多いのではないでしょうか．自分で考えてみる能力，伝統的理論，方法をも疑ってみる態度がどうも欠けている場合が多いのではないでしょうか．これは日本人の「ひとに笑われないように」という消極性に由来するものが，あるいは日本における研究システムの欠陥によるものかはよくわかりません．ヨーロッパと比べれば，むしろ日本に似た傾向が見られるアメリカにおいてすら，「日本人は知識の面では恐ろしく豊かだが，自分自身の意見はと聞かれるととまどう人が多い」という批評を形をかえ何回か聞かされ，ひどく意外にも思いましたが，本当かもしれないともひそかに考えた次第です．恐ろしいと思うのは，このことと「日本人は権威に弱い」という偏見？が一諸になって，「だから補助的な仕事は日本人研究者にやらせればよい．方針さえ与えてやれば一生懸命するから」という結論を出されることです．こんな見方が，これからアメリカへ行って独創的な仕事をしようとしている若い人達にとって迷惑しごくなことはいうまでもありません．こうした評価はもちろん一般的なものではないかもしれないし，また，機械化集団化のマスプロ時代に，ことにアメリカあたりでは，上からの指令どおりに動く補助的な研究員を数多く必要としているのは事実ですが，そういう立場でだまって働くのが日本人学者だと思われるのだとしたら大変なことではないでしょうか．

この点強烈に自己主張し，たとえ補助的なつまらない仕事をするはめにおちいっても何かしら自分の特徴を打ち出そうとするのがヨーロッパから来た人達の特徴的で，その態度には本当に目を見はらせられます．議論になる場合でも，彼らは自分の経験を十分生かして，納得のいくまで食いさがるのに対して，アメリカ人はむしろおさらい的な意見が多かったという傾向は，私の見聞したところが偶然そうだったのかもしれませんがかなり目立ちました．フランスの研究所で働いていた時の経験からしても「何もかもお説通り」という態度ではかえって不信の念をもたれると思うのです．

西欧的な自我の主張は19世紀後半で終わり，集団化マスプロ式の現代には「個性」はいらないのだとは，私には思えないのです．だからこそ「日本人は……」というふうにいわれると残念なのです．また自分の言いたいことを主張したために，「あなたは日本人らしくない」といわれたり，他の日本人から，「よく，自分の思う方向に研究がすすめられますね」と感心されたりしたことはよい思い出とはいえません．

以上書いてきたことは，論文ですら質より量が重要視されるような物量主義の国アメリカで，アメリカ人よりもむしろヨーロッパから来た人達とつき合うチャンスの方が多かったものの偏見と思われるかもしれませんが．